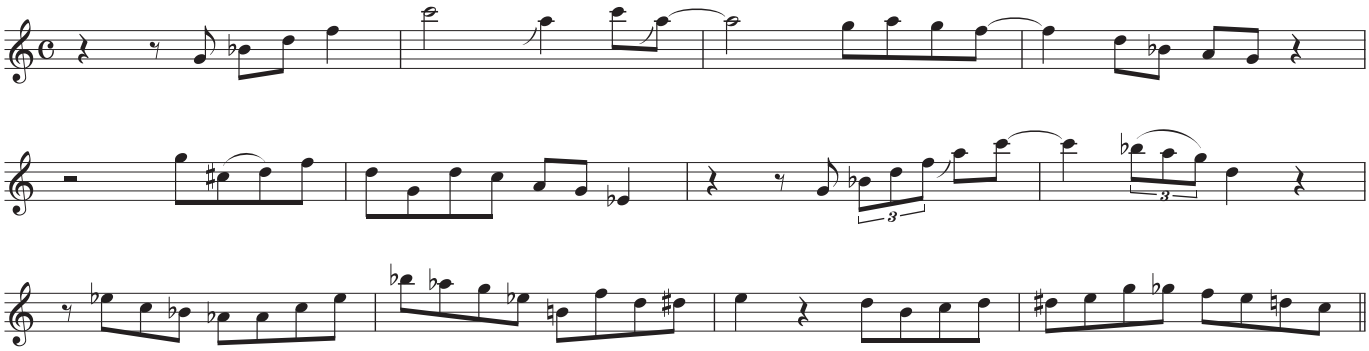
写譜の方法

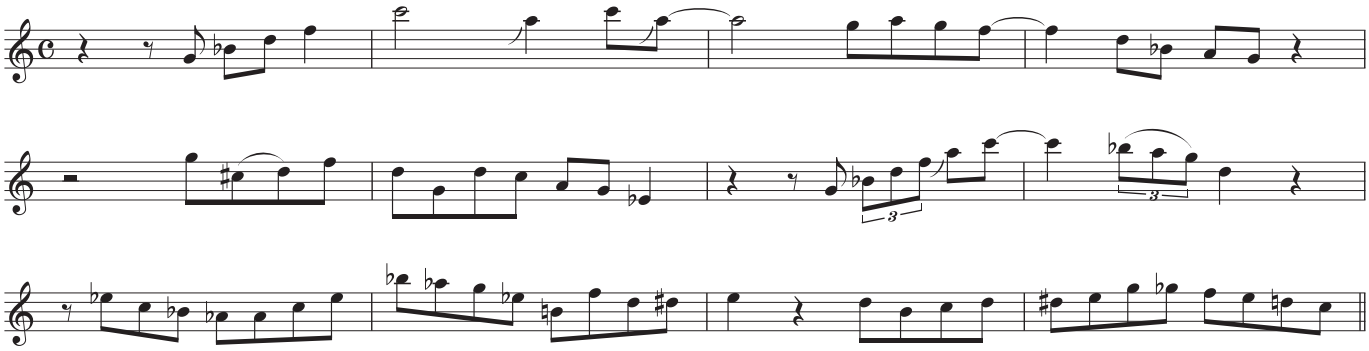


上の譜面は偉大なジャズギタリストだったウエス・モンゴメリーのアドリブ・ソロのコピーの一部です。一般にジャズのアドリブプレイを楽譜にするのは難しく、スイングという独特のリズムがある為に、譜面だけからその醍醐味を読み取る事はできません。これはまた、どのような名演奏も楽譜にしてしまうと何やら単調な音楽のように感じられることを意味します。

今まで私が受注制作してきた楽譜の中には、この分野のものも少なからず有ります。ロックのベース、ジャズのギター、また、いわゆるスタンダードソングの曲集もありました。基本的にクラシックのピアノ譜などを作るのと大差有りませんが、やはり微妙な感覚の違いも否定出来ません。

ベース譜と歌物譜の制作の際に編集部から受けた指示の一つが好例ですが、「小節線を縦に揃えてくれ」というのには少なからず驚きました。例えば上例ですが、小節毎に音符の玉数が違うので、小節幅が異なってきます。一段4小節で統一しても段毎に小節線の位置が違ってくるのはその為です。

Finale のスペーシング機能は良くできていて、ほとんどの場合、その自動調整に任せておいて問題ありません。けれども小節線を縦に揃えるとなると、特に巧い一括編集の方法もなく、小節ツールでハンドルドラッグしていくことになります。下の譜面がその編集結果です。



これも一つの見やすい楽譜ということになるのかもしれませんが、標準的な浄書法ですと、例えば 22 小節の楽譜を4段に配置するとして、音符の玉数に大差ないなら 5-6-5-6、または 6-5-6-5 という具合にします。上下の段が似通って見えないようにする為ですが、この対極の美意識と言えるでしょう。

おそらく写譜の方式から来るアイデアでしょう。五線紙にまず小節線を揃えて引き、ミスを防ぐために小節番号を書いておき、次に写譜ペンを走らせて速記のような楽譜を作るのが一般的な写譜の方法ですが、私も Finale を使い始める前はこの方法でギターの編曲譜を書いていました。特に細かい音符がないようなら、確かに手書きの場合は小節線が揃っている方が見やすく、小節数も把握しやすくなるようです。

実際に現場で働いてみると思いもかけぬことに遭遇するもので、クラシックが音楽の一部でしかないように、学んできた浄書術もまた、決して全ての商業出版に通用するものではないと思い知らされた一件でした。

2008 年 10 月　梅本雅弘